

下
 禮
 契
 子
 下

15
 1246
 4止





1246
4



國學忘貝卷下

讚岐 森長見

編輯

⑤ 秉燭或問珍上云へル書ニ仙人ノ説ヲ論シ人
 ノ壽夭ヲ述ルニ身心ヲ安クスレバ長壽ヲ得勞
 スレハ短命ナリトハセマキナリ婁禹王ハ洪
 水ヲ治天下ヲ巡リテ甚勞シタヘドモ上壽百
 歳ヲ得タヘリ亦顔淵ハ蕭然トシテ陋巷ノ間
 ニ卧シ簞瓢ノ外一物モ外物ニ觸レザレ氏三十
 二歳ニ死玉フ是ヲ以テ見レハ身心ノ苦樂ニモ

國學忘貝

卷下

中外

- 百八仙人説人壽大
- 百九上右淳朴氣ヲ書
- 百一人ノ名席ノ字
- 百二梳弟常付ノ字
- 百四保潔學死日平魂
- 百五梅正成子ノ教示
- 百七右筆能書カセニアラス百八雷ノ説
- 百九小人玉
- 百十西土清少之信和常後
- 百十一山田仁左衛門説
- 百十三流珠玉云信此方租同
- 百十四凡取日ヲ撰
- 百十六熊ノ説
- 百十七祖先名相續 上右凡
- 百十九連理木合生仁木
- 百廿此古米價
- 百廿中古知行貴言
- 百廿三於改々被ヲ射玉説 常蒲 松年
- 百廿四為我父子説 松年
- 百廿五酒田公村カ説
- 百廿六詠者常師共書説
- 百廿七多田由仲入乃書教智
- 百廿八感状形形々ノ始
- 百廿九加多法正長坂川忠系
- 百三十軍書讀却害アリ
- 百三十二足利康明臣伏ノ説
- 百三十三梅衣忠我ノ論
- 百三十四古ヨリ姓氏争アリ
- 百三十五今系因作アリ
- 百三十六錢漢姓ノ別
- 百三十七瀧田是死古云後性
- 百三十八田所良吉常陸同家ノ信
- 百三十九連歌田邊流翰常湯香花
- 百四十波尾新伝 海城ホ文考
- 百四十一押原使

ヨラズト云云サレド予ガ愚ニモ禹水ヲ治メタ
ニフモ仁ヲ行ヒ玉フノ丁返テ樂ト思ヒ玉フベ
シ顔淵ノ苦ミナク見エ玉フモ如何ナル深意カ
アリケン聖賢苦樂ハ義ト氏ニ任せ玉フ丁凡心
ニテハ論シガタカラシサテ列仙傳ヲ見レハ鬼
角ニ西土ハ情淳薄ニ思ハル此方ハ實ナル哉仙
道ハ不信用列仙傳ナドニ日ト思ヒシモ故郷ニ
歸レハ二百年ニ及ビ或ハ何世ノ孫ニナリ己ガ
家ノ跡方モナク或ハ子孫モ行方ヲ失フナド長

命ニテ誠ニ光陰一瞬ノ間モナキガ如ク不濟モ
ノ大リ秦始皇ノ如キアレドモ後世惑ヲ不辨モ
多シ此方國史ニ適浦嶋ガ子ノ丁アレドモ後世
強テ論シガタシ歌林良枝ニ夏ノ夜ハ浦嶋ガ子
ノ管ナレヤハカナクアケテクヤシカルラン亦
國書目錄ニ本朝神仙傳大江匡房撰トアリ此書
未見之

⑤上古ハ人淳朴ニシテ氣ヲ守ル丁厚ク生ヲ保
丁長シ年々物開テ外物ノタメニ志ヲ棄レ煩勞

多シ故ニ長壽モ少カラシ身體長大力量ナドモ
左アラシ謹テ舊事本紀古事紀日本書紀等ヲ考フ
ルニ

景行天皇御身長一丈二寸 日本武尊御身長一
丈力能扛鼎

仲哀天皇御身長十尺トアリサレド兼好ノ書レ
シゴトク

帝ノ御位ハ最モカシコシ竹ノツノフノ末葉ニ
テ人間ノ種ナラヌゾヤシゴトナキトカヤ申モ

恐レアリ亦高貴ニモ長壽多ク 君モ臣モ百歳ヲ
超ヘ玉フ凡下姓名ヲ記サレヌモ猶更ナラン

◎為學初問ニ云ク連歌俳諧圍碁象戲蹴鞠茶湯

香花等ハサノ三人車ヲ助クル事アルニモ非ズ
遊戯ノ具ナリ若是等ニ泥ハ詩文ニ泥ニ優リヤ
セン劣リヤセントアリ宜ナルベシサレド餘事
ハシラス連歌俳諧ハ和歌ヨリ出テ此國ノ風俗
ナレバ詩ヨリモ學タキモノカ古今和歌集ニ俳
諧歌ヲ出サレ亦史記ノ百二十六卷目滑稽傳ニ

其事見古今集抄ニモ非道教道非正道進正道云
古今集ノフハ秘傳アルコト不知今專ラ流行
セル俳諧ト稱スルモ能師傳ヲ請ベシ浮薄ノ教
ナラス感アルベシ今ヤ只卑陋文盲ノ類モ口ニ
任セテ吐キ物ノ名寄一ロツケナドノ類ニ下リ
テ点取り賭ヲ争フト混ズベカラス圍碁ハ堯ノ
丹朱ヲ教ユルトテ作りタコフトモ亦舜ノ作り
玉ヒ商均ノ愚ヲ教ヘ玉フトモ見ユ
⑤廣益俗説辨後編ニ云ク人名ニ郎ノ字ヲ用ル

ハ日本ノミナラス隋唐嘉話ニ云ク張易之昌宗
初入朝官位尚卑シ諂附者乃呼爲五郎六郎自後
因以成俗ト亦幼兒ニ犬牛猪ナドノ名ヲ稱スル
ニモ異邦ニモ專ラ稱スルコトテ小名録侍兒小
名録拊掌録ナドヲ引ケリ予史記司馬相如ガ傳ヲ見
レバ其親名之曰犬子トアリ索隱曰孟康云愛而
字之也ト見エタリ

⑥梶原景時ガ不學ナル三綱五常ト云フハ如何
ナルコトテ其名モ知ラス鎌倉殿ノ政勢ヲ參

議ル人ノ氣ノ毒サヨト和田畠山等誹謗セリ
ト然ルニ承久亂ノ記等ヲ見レバ北条泰時入京
ノ時

院宣ヲ下サレシニ泰時不得讀大ニ困リテ味方
ノ勢ノ中ニ誰カ是讀ベキト云シニ勅便河原小
三郎ガ曰武藏國住人藤田三郎コソ博學多才ノ
文士ニ候讀セラレベシトテ讀セシトアリ泰時
不學ナル已不學トモセメテハ他人ノ學ビシトナ
リトモ知リタシカ、ル大軍ノ中ニ文才アルモ

從ヘズ他ノス、ノニヨツテ如斯キ義時泰時ノ
行ヒ

天子ヲ遠島ニ遷シ奉ルノ不義禮儀ヲシラヌモ
斷リナリ然ルニ泰時行ヲ稱讚スルノ書多シ此
程モ駿臺雜話ヲ見レハ北条泰時コソ漢ノ丙魏
唐ノ姚宋ニモ耻シカラヌ人ニテ候ヘ我國ニハ
ア、リ比類ナカルベシト見ユタリ惡行ニハ比
類ナキト云フニヤ義時泰時惡行實ニ天地不容
ノ罪人ナリト俗説辨後編ニモ論セリ予情平家

物語源平盛衰記平家物語評判ナドヲ見ルニ泰
時ナドカ清盛公ヲ小松大臣ノ諫タニヒシヲ思
ハザラン泰時ヲ名將傳ナドニモ入レハベリシ
ヤニ覺ユ亦新 勅撰和歌集ニ泰時歌ヨノ中ノ
麻ハアトナクナリニケリ心ノマ、ノヨモギノ
ミシテトハ予勿論歌ノ道シハ知ラ子トモ何事
カ心ノ儘ニナリシ太平記ニ鎌倉滅亡ノ一朝
一タノ事ニ非ズトハ宜ナリ右等ノ積悪ナラン
⑤駿臺雜話ニ彌平兵衛宗清カ頼盛卿ノ鎌倉下

向ニ從ハザルヲ舉ケ大東世語ニモ德行ノ列ヘ
入タリ亦渡邊競ガ平家ニ伏セズシテ頼政卿ト
一所ニ成シナド駿臺雜話ニ其義ヲ稱ズサレ
ト武士タル者是等ヲ舉バ實ニ繁多ナラン此兩
士ハ必死ニ至リタル場ニテモナシ愚思フニ宗
清ハ頼朝卿至テ懇志ノ肯ナレバ平家ノ大將達
ヘ内蜜ニテ其志ヲ通ジ置キ鎌倉ヘ下リ透ヲ見
テ頼朝卿ヲ一太刀恨ミバ實ニ大忠ナラン不遂
ハ死ヲ潔フスベシ是勇ナラン渡邊競モ宗盛公

甚深切ノ趣ナレバ間ヲ伺ヒ飛カ、リテ志ヲ遂
 タキモノナリ亦何ゾ謀計モアルベシ鬼角臣タ
 ルモノハ主ノ國家ヲ失ヒシ跡ニテモ忠義ニ身
 ヲカユルコソ潔ヨケレ思フニ平家ニテハ上総
 五郎兵衛ナリ主家断絶ノ後眼ニ魚鱗ヲ覆ヒテ
 頼朝卿ヲ伺ヒシカト見出サレテ志ヲ遂ズ死ヲ
 潔フス古ヨリ節ニ臨ニテ忠義ニ死ヲ以テスル
 モノ多シト云ヘドモ後世其名ヲ稱讚セララル、
 アリ亦其名ノ廣ク達セサルアリ其身其名ヲ求

悍

ニガ為ナラ子氏幸ト不幸モアリツ佐藤次信ノ
 屋島ニテ死セシハ兒童ノ咄ニモ傳リヌ村上義
 輝父子吉野ニテ死セシハ老者モ常ノ如ク思フ
 モアリ村上ガ行ヒ熊野ニテノ働キ吉野ニテノ
 始末忠アリ智アリ勇アリト云ベシ其外古ヨリ
 死ヲ潔フセシ人多シト云ヘドモ後世其傳ノ達
 セザル多シ實ニ感慨ナラスヤ

⊕開際筆記ニ人ノ勇悍ナル関ヲ破リ旗ヲ棄ヒ
 死地ニ入テ先登スルニハ中華人本朝ニ不及恰

若嬰孩其闇主ニ直諫シ權臣ヲ面折シ鼎護ヲ觀ル事蒞飴ノ如クナルニ至テハ中華人尤愈レリ以是本邦人ヲ視レハ若婦女トアリ愚思フニ此方モ西土モ其人ニヨルベシ死ヲ以テ諫メ其靈ヲ殘シテ諫争セシモ多シ

⑤或書ニ曰ク楠正成其子正行ニ教示ノ曰學文ニ懈ル丁ナカレ十五ニ至ラハ義理ヲ專ラニシ字ヲ識語ヲ記スルヲ要トスル丁ナカレト亦楠氏兵庫卷ト云アリ其文ニ云ク若我子孫不義ノ

人ト成テ不守我遺戒正成速化惡思殺戮者識文如件トアリ

⑥押領使ト云丁昔ハ其所ヲ押領スルヤウナリト或方ノ問アリ左ナラズ東鑑ニモ文治二年八月六日草野太夫永平筑後國在國司押領使依天氣執達如件ナド、アリ昔時此號アル丁ナリ

⑦右筆ハ能書ノ三ニテモアルマニ職原參考ニモ謂文筆博辨之人也ト見エタリ東鑑ナドニモ右筆ノ丁見ユ木曾右筆太夫房覺明ナド思フベシ

①雷ノ事諸書參考スルニ諸説紛紜タリ聖人モ
迅雷風烈必變スト天ノ怒ヲ敬ミタマフ理ヲ以
テ不可誣秉燭或問珍ニ云ク易ニ象ヲ乾ニトル
乾ハ戌亥ノ方位ニテ雷ノ形ヲ豕ニナスト云
五雜俎ニハ大紉似唯鷄肉翅アリ其響乃兩翅奮
撲作聲也ト是モ如何ゾヤ國史ニモ無雲而雷ア
ル丁多ク見エタリ鷄ニ類セシ丁見當リシハ
文德天皇實錄ニ天安二年六月壬辰雷雨此夜左
近衛大宅年麻呂於北野見之當縮荷神社空中有

兩鷄相闘其色似赤相闘之間毛羽散落地雖相隔
見似眼前良久而止此語類妖妄而記恠也トアリ
信濃地名考ヲ見レハ立科山ニ異獸アリ夏月雷
雨ノ起ル時小獸石穗ニアラハレ飛テ雲ニ入ル
事蝨ノ如シト亦或年暴雨ノ後山ヨリ死テ流出
ル小獸ニツアリ大ク小犬ノ如クニテ灰色ナリ頭
長クク嘴半黒シ尾ハ狐ノ如クフスサニ利爪ハ鷲
ノ如シ按ルニ霹靂ノ地樹木ニ爪ノ痕アルモノ
是ナリ亦明和七年閏七月伊奈郡駄科村雷獸ヲ

得タリ狀左ノ如シト亦近江國カバミノ村ニテ
雷落シトキ村人雷ヲトラヘタリトテ見ル者市
ノゴトシ其獸ノ狀右ニ云フモノニ少モタカハ
ズト同書ニ委ク其説ヲ擧タリ亦是ニ同キハ市
井雜談集ニ三河國小坂井村茶店ノ井戸ヘ大雷
ノ節落タル獸ハ形狸ニ似タリ是ヲトラヘ食物
ヲ與フルニ何ニテモ不喰餅ナクシテ終ニ殍ス
トアリ

○宇治大納言隆國卿ノ今昔物語ニ源行任朝臣

越後守タル時小舟打寄セタリ廣二尺五寸長一
間斗リ戯レニ作りシトモ見エス如何ナル小人
ノ乗タル舟ニテアルラニ年老タル者ノ云ケル
ハ前々モカ、ル小舟寄リアリ此舟ニ乗ル程ノ
入アル國ハ北方ニ有ベシト下畧 亦萬國掌菓圖
ヲ見レバ小人國ト云ヘルニ所アリ亦史記評林
百二十三安息傳ニ括地志ニ云小人國在大秦南
人纔三尺其耕稼之時懼鶴所食大秦衛助之トア
リ亦三才圖會ニ東方有小人國長九寸ト云 云亦

屍

今昔物語ニ藤原信通朝臣アル國ニ受領ノ時死人ノ長五丈斗頭ヨリキレテナシ右ノ手左ノ足モナシ女ト見エタリ東西ノ濱ト云ヘル所ヘ寄タリト陸奥國海東ト云ヘル所ヘモ大人打寄せタルヲ載セ玉ヘリ亦采覽異言ニ長人國ノ丁委ク元和中長大ノ女屍金浦ニ漂ヒ寄り亦寛文ノ初南部東海ノ渙大臂ヲ網ニ得タリ其指骨ノ間長四寸アリシヲナド載セタマヘリ

①西土今ノ清編集アリシ圖書集成ト號スル書

一萬卷アリ新渡ニテ其部ノ内圖書輯勘ト云ヘル百三十卷アリ清帝自序ヲ製作アリ其畧文トテ朕姓源義經之裔其先出

清和故號國清トアリ清ト號スルハ

清和帝ノ清ナリト或儒考ヲ加ヘ書ルヲ前年見

テ不審ナリシ然ルニ右ノ書彌渡リシト見エ去

々天明八年辛卯年新刻セシ古文孝經序跋ノ序ニ古今圖

書集成一萬卷寶曆庚辰歲清客汪繩武齋來其書

全套明和甲申納之官庫ノ文アリ猶亦其書渡

リシ實事傳義ノ丁アレド爰ニ記セズサレド右
 清帝自序アル丁ハ其真偽ヲ不知亦鎌倉實記ヲ
 見レバ義經ノ子義鎮ト云ヘルノ傳ヲ舉タリ金
 史別本ニ列將傳ト云ヘル書アリトテ是ヲ引テ
 委ク記シ陸奥高館落居シテ夫ヨリ蝦夷へ渡リ
 韃靼ニ至リ金ノ章宗ニ從ヒ大功アリシ丁ヲ舉
 タリ右ノ金史別本列將傳ト云ヘル書ヲ年來望
 ミ書肆ニ問ヘドモ唐本ニ未見當ノ由ナリ然ル
 ニ和學辨ヲ見レバ金史別本列將傳ト云ヘル書

ハ好事虚談ノ由ヲ委ク明セリ亦義經蝦夷軍談
 ト云ヘル書アリ其事實ヲシラス亦蝦夷志ヲ見
 レバ義經ノ事ヲ今以テヲキクルミト稱シ像ヲ
 祭ル辨慶崎ト云モアリ寛永ノ頃越前ノ船韃靼
 へ漂着セシニ義經ノ像ヲ彼國ナドニモ祭ル事
 ヲ見タリトアリ地理書ヲ考レバ蝦夷ヨリ韃靼
 へツバケリト見ユ彌今清ハ義經ノ後胤ナラバ
 西土ヲ掌握アリシ丁實ニ快然タル哉

寛文中播磨高砂船暹羅ニ渡リ天竺摩伽陀

國波年天亞城主名ヲ號於夜伽羅保年是ハ本伊
 勢山田ノ産ニテ山田仁左衛門ト稱セシ者彼國
 ニ渡リ武功アリ彼地ヲ手ニ入レシヲ和漢三
 才圖會ニ委ク舉タリ亦采覽異言ニ山田ニ左衛
 門暹羅國ニテ國事ヲ主管シ説其主與我通聘元
 和辛酉夏國王遣使齎金葉書來賜方物自是聘問
 無絕至寬永戊辰冬王死明年己巳春嗣主遣使
 奉金葉書來修旧好其事本末具詳別考故不贅焉
 トアリ奇談ナリ

琉球ノ舜天王ハ鎮西八郎ノ子タルヨシ南嶋
 志ニモ舉ラレタリ亦中山傳信録ヲ見レバ舜天
 ノ事ヲ日本

人皇後裔大里按司朝公ノ男子也宋淳熙十四年
 丁未舜天即位在位五十一年壽七十二喜熙元年
 丁酉薨トアリ

中山傳信録ヲ見レバ琉球國言語此方ト粗同
 キ丁多ク國中常行ノ錢トテ寬永通寶ヲ記シ神
 德寺ト號スニ八幡宮アリ尚德王所建ナリトア

リ亦同書舞曲ノ中ニ此方ノ道成寺ノ故事ニ類
セシトアリ其文曰第三爲鐘魔事中城縣姑場村
農家陶姓有兒名松壽年十五歲白晢端麗至首里
從師一日行至浦添山徑中向昏黑持一竹竿點地
行見燈求宿乃一獵家父出夜獵止一女年十六頗
妖麗留宿挑之松壽坐睡不許強擁之松壽拂衣起
女羞且怒持獵具欲殺松壽松壽走女逐之山曲有
萬壽寺主持僧普德頗有行松壽奔入號救四顧無
隱處僧伏之大鐘內令三徒守鐘旁女至三僧戲黷

逐之_ラ女不得松壽仰突如癩出門去僧啓鐘有聲女
還奔入方欲爲惡忽披髮改形入鐘內普德與諸僧
繞鐘咒之_ス女自鐘倒垂首出見鬼面手一又下擊諸
僧僧咒不已寺外大雷電女化魔走出不知所在事
皆百年前國中事トアリ此方道成寺ヲ摸シテ述
作セシニテモアルマジ大同小異怪談ナリ

瓜ヲ取ルニ日ヲエラブ一貫之土佐日記ニ瓜ノ
長クナルヲ見テ日ヲ數レハ今日ハ子ノ日ナレ
ハキラズト見エタリ拾芥抄ニ九條殿遺誠ニモ

忍日除手甲寅日除足甲ト書タヘリ此事ヲ細
註ニナクハ...

天曆御宇説也トアリ此遺誠ノ丁ヲ季吟土佐日
記ノ抄ニモ引ケリ...

皇南留別志ナドニ土佐日記ノ海賊ヲ怖レシ丁
ヲ舉タリ實モ昔時ハ國守ノ領モ今ノ如クナラ
子バ左ナランサレド此日記初二男モスト云日
記ト云モノヲ女モシテコ、ロミントテスルナ
リトアリ女ノ筆意ニテ書レシヲモ思フベシ惣

テ物語ノ類ナド証不証アリ

皇南留別志ニ羆ヲシクトトハ何者ガツケタラ
ントアリ本草綱目ニ羆ヲ似熊而大色黃白トア
リ蓋シロクニノ畧語ナルベシ

皇或儒ノ經濟録トテ書ルニ日本人先祖ノ名ヲ
相續テ稱スル丁アタラス舊記ナド考ルニ其差
支アリトハ宜ナランサレド是モ上古ヨリ國風
ナラン

疫火火出見尊ノ御孫

神武天皇モ火火出見ト申奉リ 大己貴命ノ御
孫不替奉稱了モ見エタリ亦閑際筆記ニ西土ニ
モ父子同名ノ者ヲ舉タリ亦臣子之禮必避君父
之譚ト

桓武天皇ノ詔ナレハ延曆以後改避スベシト

東百官ト云アリ亦相馬百官トモ云フ結駝錄

ニ是ハ鎌倉

親王ノ時起レリ相馬將門ガ置トハ恐ラクハ非
ナラントアリ諸書ニモ評スル如クイヨク將門

是ヲ置ナラバ實ニ汚穢アルノ号ナリ亦職負令
ナド考レバ本官ニ同セシモアリ

國史ニ連理木生スルヲ吉瑞トス此文所々ア
リ延喜或ニ合生連理木者仁木也以為祥瑞ト見
エタリサテ大木モアルモナリ日本書紀ニ

景行天皇到筑紫後國御木居於高田行宮時有僵
樹長九百七十丈中畧未僵之先當朝日暉則隱杵

嶋山當夕日暉覆阿蘇山也

天皇曰是樹者神木故是國宜号御木國トアリ

米價ノ下日本書紀ニ云國直是時天
顯宗天皇二年冬十月戊午朔癸亥宴群臣是時天
下安平民無徭役歲比登稔百姓殷富稻一斛銀錢
一文トアリ亦續日本紀ニ

元明天皇和銅四年錢一文米數六升トアリ亦三
代實錄ニ

清和天皇貞觀八年二月大政官處分定左右京白
米一升直錢四十文前廿六文今加十四文黑米三
十文前十八文今加十二文是歲穀價騰踊東西津

頭白米一斛七貫二百文黑米四貫百文由是増定
京邑沽價トアリ亦百練抄ニ

後堀河天皇寛喜二年六月二十四日甲申定米價
斛錢一貫文ト亦太平記ニ元亨元年夏大旱此年
錢三百文ヲ以テ粟一斗ヲ買トアリ亦重編應仁
記ニ弘治三年五月廿三日ヨリ八月九日ニテ天
下大旱駿今年金一两ヲ以テ米五斗ヲ交易ス前
代未聞ノ下ト記セリ亦秋齊間語ニ室町殿日記
ヲ引ケル文アリ云ク御房衆半下衆切米拾二石

賣拂可申由被仰越候此頃兵庫ノ賣買壹石六匁三分五分之由スイタヤ新左衛門申候御心得可有之候トノ文ニテ是ハ天文九年ノ月ナリ亦續草廬雜談ヲ見レバ古田兵部ノ米ヲ賣テ請取ヲ書シニ十文目ニ付一石替也トノ文ニテ是ハ慶長四年卯月十五日兵部判トアリ亦太平記評ヲ見レハ楠ノ米ヲ買山門ニ寄附シ軍餉ニモ備フ米一千二百餘石ヲ黄金百兩ニテ買得ラレタル月ヲ記セリ亦唐書ニ玄宗ノ開元二十八年ノ冬

米一斛直三錢トアリ亦貞觀政要ヲ見レバ太宗ノ貞觀三年ノ文ニ逐年彌豐以三四錢買米一斗ト見エタリ亦官米ヲ出ノ民ノ貧苦ヲ救タマフノ事其價三代實錄ニ貞觀九年四月辛卯東西始置常平所出官米而糶之米一升直新錢八文京邑之人來買者如雲是時穀價騰躍内外飢饉米一斛直新錢一千四百由是官糶以救俗弊焉トアリ

○中古知行ノ高ヲ百貫或ハ千貫ト稱セシ事諸說多シ上古地方ノ法ハ令義解田令ニ出タリ上

中下田ノ法租稅并ニ調庸等ノ丁古書ヲ見師傳
ヲ請ベシ古書ニハ稻何束ナド、アリテ其稻ノ
量目ノ法亦封戸ノ丁ナドアリ貫ト稱スル丁鎌
倉時代ニモアリシ北条家系圖ニ相模入道ノ領
知二十八万七千貫トアリ猶考ヲ加ヘテ今ノ知
行ニシテ百四十三万五千石トアリ亦弟慧性ノ
領知十八万五千貫今ノ高ニシテ九十二万五千
石ニ當ルト云云亦或儒ノ鈐録ト題セシ書ニ知
行ヲ何十貫ト云丁田一坪ニ苗一把種ル丁ニテ

百坪ニハ百把種是ヲ百目ト云千坪ニ千把ウエ
是ヲ一貫目ト云此積リニテ大抵十貫ハ百石百
貫千石ニ當レリトモ上中下ニヨリテ一定セズ
是古法也トアリ撈海一得ニモ鈐録ヲ引用セリ
亦數度宵談ニハ鈐録ヲ引テ相違ナリト書リ本
朝今ノ制三百坪ヲ以テ一反トシ三千坪ヲ以テ
一町トス水帳ノ石高所々ニヨツテ不同アリト
イヘドモ大抵一反ヲ一石五斗或ハ一石六斗一
石三斗トス然ハ百坪ノ高大略五斗ナリ所謂十

貫ハ一万坪ナリ乘五斗得五十石コレヲ以テ思
ヘバ千貫ハ五千石百貫ハ五百石十貫ハ五十石
ナルベキカト見エタリ亦草廬雜録ニ知行ヲ
貫ヲ以テ稱スル丁諸書ニテ考レ凡知カタカリ
シニ今仙臺人万石以下ヲバ貫ヲ以テ稱ス十貫
ヲ百石トス是ニテ能ク知タリ誠ニ知ザル事ハ
衆人ニ問尋ヌベキ丁ナリト見エタリ亦俗説贅
辨續編ニ曰知行百貫ノ辨中古地方ノ知行ヲ計
ルニ百貫千貫ト云丁數目アリ今モ仙臺ニハ其

數名アリト云此數西國ニテハ明カニ知ル人ナ
シ武家系圖相模入道平高時ノ下ニ曰領知二十
八万七千貫當當代知行百四十三万五千石是田
五段ヲ一貫トシタルモノナリ亦或人奥ノ人ニ
聞タルトテ語ケルハ古永樂錢十文ニ米四合八
勺ヲ賣故ニ百文ハ四升八合一貫ハ四斗八升百
貫ハ四十八石ニ當ル然バ知行百貫ト云ハ今ノ
知行百石ト同シ後世家ニヨリテ知行ヲ藏米ニ
テ遣スニ四ツ八分ノ免ナラシトテ米四十八石

ヲ百石ト名ツケテ遣スハ此古法ナリ今按スル
ニ我友人古語ヲ以テ曰右兩説皆非ナリ土佐國
幡多郡中村郷不破村於八幡宮寶藏ニ一條家ノ
古文書アリ曰文ハ四升八合一貫ハ四升八合

於本郷中村

八幡江新御寄進田之事

中ノ前田

一、所壹貫

有間之内

小任小作

弥五郎

ハシラ松

一、壹貫分

目黒之内

泉虫

大ホトケ

一、七百五十分

藏橋分

三ツ

一、二百五十分

立石分

合參貫分數

永祿二年己未三月吉日

康政

印

右ノ文書ヲ按スルニ田千步ヲ一貫トス今ノ三
段三畝十步也是錢千文ヲ一貫トスルガ如シ然
ハ百貫ハ田十萬步今ノ法ニシテ三十三町三段
三畝十步知行三百三十三石三斗三升三合トス
ベシ恐クハ奥ニテ申モ如斯ナラン歟トアリ亦
行餘隨筆ニ曰足利ノ世ニ祿ニ貫ヲ云フアリ田

千歩ヲ一貫トシ是ヲ積リアゲテ百貫ハ田十萬
歩今ノ法ニアツレバ三十三町三畝十歩ナリ千
貫ノ録ナレハ三千三百三十石餘ノ所ヲ領セル
ヨリ伊澤某辨解セリ關東ニテ苗百把ヲ百目ト
云諉アリ是ヲ考レバ千石ハ千貫ノ事ナルベシト
或人語りキトアリ亦勸農古本録ニモ永錢ヲ以
テ年貢收納ヲ取立ル法アリ繁多ナルガ故ニ漏
シツ猶亦筆ノ隨意記シヌ予ガ家ニ永禄三庚申
年當國多度郡天霧山城主香川彈正忠之景ヨリ

頼レテ加勢セシトアリ其謝禮状令ニ所持ス其
畧文ニ云ク今度從阿州到當國亂入之刻別而御
入魂之儀候間貴所知行之内多度郡葛原庄鴨請
錢拾三貫文令合力候トノ書ナリ如何ナル筭合
カ家記ニモ分リガタシ右村々當時ハ其高合テ
凡二千五百石ニ近シ右諸書ノ説々參考ノタメ
ニ記シヌ

皇頼政卿ノ鷄ヲ射玉フ丁諸説紛紜タリ沙石集
ヲ見レバ菖蒲前ヲ賜リシ事ハ不審アリ沙石集

ニハ頼朝卿京ヨリ菖蒲ト云ヘル美女ヲ呼下シ
玉ト同シヨハヒノ女房十人漿東サセ菖蒲ヲ見
知ラハ賜ルベシト仰ノ時梶原三郎兵衛尉景茂
マコモ草アサカノヌマニシケリアヒテ何レア
ヤメトヒキヅワヅラフト詠リト俗説辨ニモ此
事ヲ引テ沙石集ハ梶原景時末子無住法師作ナ
リトアリ予沙石集ヲ見レバ弘安年中ノ序アリ
亦頼政家集ヲ見ルニイヅレアマメトヒキヅワ
ヅラフノ歌ナシ亦諸書參考スルニ鷓ヲ射玉フ

事其御宇ニモ異説多シ亦鎌倉實記ニ台記ヲ引
テ實録ニ不見ノ由ヲ舉ケ其頃ノ怪談鷓ヲ射シ
ニ類セシ異説ドモヲ舉タリ亦結駝録ヲ見レバ
正説トモ見ユ下妻氏ハ源三位頼政ノ後裔ナリ
鷓ヲ射シ弓矢今ニアリ小兒夜啼ニ壁間ニ掛レ
ハ止トアリ亦郎等ニ猪早太トアレド源姓系圖
ニ猪鼻早太高直或ハ井早太領遠江國猪鼻故曰
猪鼻多由源氏太田伊豆八郎廣政子仲政為養子
ト見ユ仲政ハ頼政卿ノ父也

賴政卿三位昇進ノ事ヲ源平盛衰記平家物語
 等ニノボルベキタヨリナケレバコノモトニシ
 井ヲヒロヒテヨヲワタルカナト詠アリテ三位
 ニ叙セラレシト見ユサレド或書ニ玉海ヲ見レ
 ハ治承二年清盛公ヨリ三位 奏請ノ文アリ諸
 源多陷逆賊唯賴政資性正直勇名被世齡喻七旬
 未昇三品伏乞未歸黃泉之日枉賜紫綾之恩於是
 叙從三位時人異之ト見エタリ亦無名抄ニ俊惠云
 賴政卿ハイミジカリシ哥仙ナリ心ノツコニテ

哥ニナリカヘリテツ子ニコレヲワスレズトア
 リ

勅ナレハトテ父為義ヲ義朝ノ裁セラレシハ
 孝道ヲ闕リ恩賞ニ申カエシ夫ニテモ

勅許ナクハ官禄ヲ辭シテ父子共遁シテ猶不叶
 ハ父子共ニ誅ヲ請シ太平記ニ石堂四郎入道ガ
 子父叛逆ノ事ヲ尊氏卿へ告由セシトアリ其後
 ノ事ハ不記太平記理盡抄ヲ見シニ後父カ一命
 ヲ恩賞ニ申カエテ孝養ヲ盡セシ事見エタリ亦

姦

北条家ノ松田尾張守ガ子左馬助父ガ叛逆ヲ申
シテ其一命ヲ願シニ許サズルモ亦其主ヲ不恨
ノ事アリ

⑤俗説辨後編ニ酒田公時ガ事ヲ論シテ山姥ガ
子ト云ルハ不審ナリ公時ガ母赤龍ニ通ジ孕シ
子トハ我淫亂ノ譏リヲフセギシニヤ網定道季
武ハ出自正シキ士ドモガ山姑ガ子ト同列ニ四
天王ナド、ヨバレテハ中々一日ノ仕官モナリ
カタカルベシ定メテ公時モ姓氏正シキモノナ

リケメ舊記ニ見エザルヲモツテ此誣証ヲ蒙ル
不幸ナリト云云猶引書等ヲ出シテ其事ヲ評論
セリ予今昔物語ナドヲ見テモ印刻ノ書ニテハ
公時ガ姓氏闕テ見エズ南留別志ヲ見シニ坂田
ノキントキハ公節ナリ物部ノ系圖ニアリト記
セリ

⑥太平記ニ土岐頼貞ガ妻父齊藤太郎左衛門ニ
夫ガ隱謀ノ了ヲツゲシヲ太平記大全同評判理
盡鈔ナドニ賢ナリト評セリサレモ夫ノ不忠不義

其愚ナルヲ千載ニ殘サシメタリ何ゾ賢女トモ
稱セン春秋左氏傳ニモ是ニ類セシハ鄭伯其臣雍
糾ニ命シテ祭仲ヲ殺サシメントス雍姫知テ其
母ニ父ト夫ト何レカシタシキト問シニ母カ答シハ
婦人ノ義ヲ失ハシメタリ儀禮ニモ婦人有三從
之義無專一之道故未嫁從父既嫁從夫夫死從長
子故父者子之天也夫者妻之天也ト見ユ亦雍姫
カ事ヲ捫蝨新話ニ評セリトテ或說ニ姫カ母ハ
知父不知夫ト爲姫計諫其夫使辭于君不可則涕

泣而道之而陰諭祭仲使爲備而勿泄也不亦父夫
兩全乎ト見エタリト土岐カ事ハ奉

勅テノリ其黨モ多シ其義理深カラシ

源滿仲朝臣ヲ入道ト申サズ新發智ト申セシ
ハ如何ニト思ヒシニ攝政太政大臣兼家公出家
シ玉フノ事ヲ神皇正統紀ニ執政ノ人出家ノハ
ジメナリ其頃出家ノ人ナカリシカバ入道殿ト
ナシ申ケルヨリ源滿仲出家シタリシヲモハバ
カリテ新發智トゾ云ケルトアリ

和事始ニ感狀ハ頼朝卿ノ佐々木盛綱へ賜リ
シヲ始ナリトス東鑑第三ニ自昔雖有渡河水之
類未聞以馬凌海浪之例盛綱振舞希代之勝事也
ト云云是感狀ノ始ナリトハ予不審モアリ隨意
集ト云ヘルヲ見シニ熊谷直實遺狀トテ記セリ
前文畧ス先祖相傳所領安堵御判形七并保元元
年以來至建久年中軍忠之御感狀廿一有之トア
リ下文畧建久元年六月九月蓮生判トアリ是ハ
武藏熊谷寺ニ収リ有之ト云云此遺狀ノ文前年

外書ニテモ見シニ其題名ヲ忘セリ保元元年ヨ
リトアレバ佐々木ノ藤戸ヲ渡サレシヨリモ以
前ニ感狀モアリシ亦軍防令ニ大將以下連署即
申勲之日更依此書以為勲狀トアリ亦下ノ條ニ
所謂勲薄者也トアリ南嶺說ニ勲狀ヲ是ヲ感狀
トアレド今ノ感狀ニモ不當ヤウニモ見エタリ
頼朝卿ヨリ佐々木へノ感狀ニ昔ヨリ河水ヲ渡
スノ類アレドモ未ダ馬ニテ海ヲ凌ノ例ヲ不聞
トアレド其先頼信朝臣平忠常ヲ討亡シ玉ヒシ

時諸軍馬ニテ海上二十餘町ヲ渡シ玉ヘリ亦熊
谷直實一ツ谷ニテ敦盛ヲ討テ剃髮ストハ虚談ナ
ルヤ東鑑ヲ見レハ建久三年久下權守直光ト境
論ノ時不審ヲ蒙リ其座ニテ剃髮ス年代等齟
齬セリ委クハ東鑑ニ見エタリ亦

神武帝ノ日臣命ノ勲功ヲ賞シ玉ヒ道臣命ト名
ヲ賜ヒシハ軍功ニ名ヲタマフ始ナルベシ

加藤清正母衣ノ者北人撰メレシトキ諸士入
簡ヲサス其中ニ坂川忠兵衛ト云者己ガ名ヲ書

入ル不審ニ思ハレ尋シニ私ゴトキ如何ゾ他人
ノ志ヲ知ラン我身ノ可勤ヲ覺悟仕レハ然ナリ
ト云 甚感ジラレテ一増ノ加増六百石宛行ハ
レシトアリ此事清正記武將感狀記等ニモ見エ
タリト覺ユ實モ知ヲ問シニ聖人モ知人トノ夕
ニヒシ

和學辨ニ近頃印刻ノ軍書等見ルニ益ナキノ
三ニ非ズ却テ大ナル害アリト實ニナルナリ或
書ニ齊藤實盛ガ錦ノ直垂ハ二心ノ耻ヲアラハ

セシナリ佐々木ノ平家ノ祿ヲ請サル志ニハ似
 ルベクモナレト評セリ夫ニ此程モ四海太平記
 ト云ヘル書ヲ見レハ是ハ近江佐々木六角家ヲ
 重ンジテ作レル書ト見エ餘リノ門ニ佐々木家
 ヲ讚セシトテ平家ヨリ鎮守府將軍ニ 奏任セ
 シトアリ其餘間車跡軍記ナドヲ見ルニ江源武
 鑑本朝武林傳ナドニヨレルヤ六角家ヲ讚揚セ
 リサレド近江ハ京極家六角家江南江北並立テ
 屋形ト崇敬ス印刻ノ軍記等ニテハ淺井三代記

ナドニ委ク記セリ重編應仁記ニ和論語江源武
 鑑等ハ堅田ノ土民ノ子少シ文字ヲ知リテ己ガ
 佐々木ノ正統タラント偽作セシトヲ舉タリ
 眞足利將軍家ノ時ハ如何ナル事ニテ明へ臣伏
 シ表文ニ年号ニテヲ用ラレシ義政公ノ表文等
 委クハ善隣國寶記ニ見エタリ此書ハ文明年中
 ノ古書ナリ明史ニ日本國王ニ封シ薨セラレテ
 謚號等ノ事モ見エタリ
 鐵炮ノ渡リニ事ハ和事始ニ詳ナリ後太平記ニ

足利將軍家へ始テ奉リ時太平ノ重器ナリトハ
宜ナル哉此物古ヘアラバ奥羽前九年後三年ノ
如キ長陣モアルミジ朝鮮ヘハ此方ヨリ渡セシ
ト見ユ懲怒録ニ宗義智獻ニ孔雀及鳥銃槍力等
物命放孔雀於南陽海島下鳥銃於軍器寺我國之
有鳥銃始此ト見ユタリ
或僧ノ述作トテ楠石論ト云ヘル書アリ楠ト
大石忠義ト稱スレドモ其失アリトテ評論ニ正
成討死セシトハ虚ナリ九十七歳ニテ法華經ヲ

書寫シ自ノ跋尾アリ河内觀心寺ニ所藏セリナ
ト、實ニ珍說ヲ舉タリ先此評論ハ差置又僧尼
令ニ僧尼習讀兵書ハ科罪トアリ僧尼令ニ法令
ノ事委シ

古ヨリ姓氏ノ虚實相争フ事アリ日本書紀ニ
允恭天皇四年詔相争氏姓人等沐浴齋戒各爲盟
神探湯各探湯氏姓自定無詐人トアリ亦弘仁六
年ニ新撰姓氏録三十一卷アリ序ニ一千一百八
十二氏ト記シタヘリ異國ヨリ歸化ノ姓氏モ

繁多ナリ源平藤橘ノ三姓ノヤウ聞心得ルモア
 リ亦或儒ノ姓氏解ト云ヘル書アリ日本上古ハ
 姓氏ナキトハ如何ゾヤ神代卷ニスミ皇孫ミコ救サユ天アメ鈿女命ニギハヤヒ汝宜ニギハヤヒ以テ所ヲ顯アハ神名カミナ為シ姓氏カハシトアリ
 職負令ニ治部省掌本姓繼嗣ノ事アリ昔時ハ系
 圖姓氏ヲ改本領安堵等ノ沙汰アリ故ニ系圖ヲ
 重ニス亦所領ニ居住シ在名ヲ稱スルヨリ自然
 ト本姓ヲ失フニモ至レリ且今姓氏稱號等ノ差
 別ナク心得ル方モ聞アリヌ

皇或書ニ今系圖作りト云者アリ諸家系圖ヨリ
 稱號ノ同キ類ヲ引合セ漸ク己ガ父祖位ニテヲ
 知タルニ生レ出ヌ人ヲ何代モ系リ合セ人ヲ欺
 クノ輩アリ實ニ天地ヲ欺ク罪人ナリト誠ニ宜
 ナリ是ハ多ク大系圖ヨリ系リ合スナラン諸家
 大系圖ト云ヘル書三十卷ト亦十四卷トノ二部
 アリ師傳アリテ十四卷ノ系圖ハ參考等ニ取り
 用ユ

皇予カ縁類ニ綾ノ姓ノ者アリ問テ曰我綾姓ノ

字或著漢ノ字ニ改テモ同事ナラント云者アリ
如何ト予曰嗚呼是何ノ謂ゾヤ先舊事本紀ニハ
日本武尊ノ兒武卯王讚岐綾君等祖トアリ亦古
事紀ニモ建見兒王者讚岐綾君等之祖トアリ日
本書紀ニハ讚岐綾君之始祖ナリト記シ玉ヘリ
國史ニ出ル處ノ姓ニテ稱號ニモアラズ漢姓ハ
國史新撰姓氏錄ニモ異國歸化ノ姓アリ綾姓ハ
恐レ多クモ此方ノ
皇胤ナリ漢ハ異國ノ末流ナリ謹テ思量スベシ

ト云ヘハ大ニ驚テ感服セリ右等ノ類モ不_{スレ}少

⑤當國ニ讚留靈記ト云ヘル古書アリ

景行天皇御宇廿三年南海大魚アリシヲ

日本武尊御子此國ヘ下リ冬ニヒ討平ゲ玉ヒテ
此國ニ留リ玉ヒ國守トナリ玉フ故ニ讚留靈王
ト申奉ル是ヨリ綾姓和氣姓等出タル事ヲ記シ
タリ此事讚岐大日記玉藻集ナドニモ記セリ當
國或古家ノ系譜ヲ見レハ此事蹟ヲ記シ日本書
紀ニ出ルトアレドモ是ハ附會ノ説ナラン國史

實録ニハ其事見エズ右ノ事跡不審ノ了モ多シ
サレド亦其據トコロモアラシ其古言ノ當國ニ
残りタル處アリ

豊田所貞吉先生ハ木谷ヲ稱シ後母家ノ田所ヲ
稱號トス母兼テ傳云フ同姓常陸ニアリト因テ
江戸居住行餘ノ暇常陸へ趣キ其郡村モ不知ラバ
彼方此方ト尋經廻シケルニ不圖モ其家稱へ尋
當リ又家富農事ヲナス鹿忽ニ問寄ベキヨスガ
モナカリシニ家主ト覺シクテ來客何國ゾト尋

子ケレハ讚岐ト答フ然ラバ尋申ス了アリ其國
ニ田所稱ノ者ナキヤト云 云思設ケレ處ナレバ
則其由ヲ述ル家主モ驚喜曰左ナレバ暫ク留申
サントテ由緒ヲ語テ曰系譜我方ニアレバ委ク
知りタマフニ我方ハ二男ニテ讚岐ノ方コソ
嫡家ナレ先祖ヨリ田所郷ヲ領セリ源平合戦ノ
ミギリ兄ハ

安德天皇ノ供奉シテ西國へ下レル時我祖ニ云
ク其方ハ舊領へ引籠リ家系ヲ全フスベシト云

夫ヨリ兄ハ讚岐屋嶋ニ留リ子孫アリト家譜ニ
 詳ナリトテ出之其始末ヲ語り數百年ノ後タレ
 ド今猶見共ニ感慨ニ沉ミントテ其事ヲ語ラレ
 キ何レカ其祖ナキノ人ナカラ之其姓氏稱號ノ
 出所ヲ訂シ其祖ヲ祭り血脉其統ヲ重ニスル事
 實ニ孝タルベシ

國學志貝下卷終

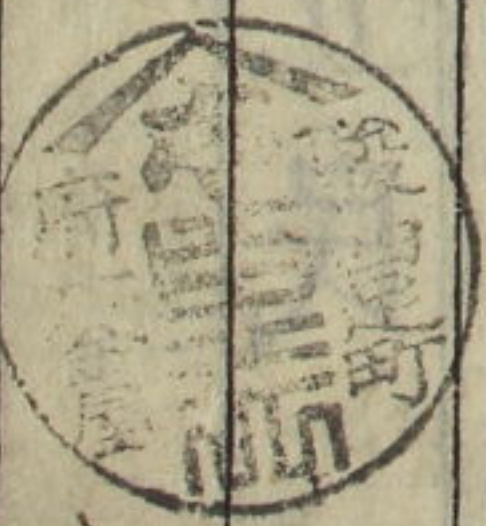
國學志貝跋

仲尼之道釋氏之法所爲臻
 其極者以其創業之刻意能
 吻合各域之風俗也若不調
 和其方土之風氣則圓鑿而
 方柄其道不可以行焉其法
 不可以施焉教導之餘光安
 能及於天下耶吾東方有上
 古神聖之道存焉所謂律令

格式是也蓋亦隨吾國俗風
 氣而節制之者也苟有人欲
 修仲尼之道釋氏之法行諸
 東方者而不由吾古先
 聖皋載橐燻之法與夫萬民
 薰染之道而沾々獨立鼓舞
 其道豈能不謬乎浹洽于膠
 柱矣國自有國之憲度也古
 曰止凡人之闕闕則堯舜之

道不如寡妻之誨諭矣夫以
 吾道而導吾民此其耳目之
 所慣性情易化猶指掌而已
 易曰樽酒簋飯用缶納約自
 牖堀江森氏所用心顯在于
 此歟旨哉茲編可謂國學之
 左券明法之龜鑑哉
 干時

天明歲次甲辰三月



同郡屏風浦

三谷景信立民



廣濱堂藏版

崇高堂藏板目錄

大坂心齋橋筋南久寶寺町

河内屋八兵衛

算法統宗大成

明程汝思輯
算術の根元と
あるなり

五冊

東行筆記

常山先生著
備前上りには
通中紀行を
入

一冊

和漢算法大成

八人見一りの
秘奥の算術を
官城清行著七冊

東海道巡覽記

たのり記らん
名所旧社并
社

一冊

屯繕物語

藤原為業作
石長の手記を
そと家と著る
古文なり

一冊

本曾路巡覽記

東海道の
しん

一冊

古今著聞集

福季著
面白き事実を
叙分ちらつむ

二冊

善光寺巡覽記

善光寺の
こといふ
しん

一冊

雅筵醉狂集

正親町公通の
しん

四冊

西園筋道中記

大坂より
しん

一冊

繪本義経記

北尾重政画
義経の一代の
経と委くわ
しん

五冊

同海上船路記

しん

一冊

繪本いふは歌

鈴木春信筆
子供のや
しん

三冊

汐時計

しん

一冊

寒葉齋畫譜

風流を
しん

五冊

戲場篇

銅脈先生作
しん

一冊

東溪畫譜

しん

二冊

類字假名遣

林春齋先生著
しん

一冊

武將感狀記	熊沢先生著 古より武功の そのりは	十冊	大上感應編	吾邦後を あつ事を ら道	一冊
北條五代記	小條五代の 実録に か	十冊	感應編俗解	いんごの いんごの	二冊
楠公櫻井書	正成公 お	二冊	備前孝子傳	備前公 いんごの	五冊
國學忘貝	和字に を	三冊	大寶用文章	大寶用 を	一冊
南嶺子	桂秋齋著 有 和	四冊	庭訓七寶往來	七寶 を	一冊
南嶺遺稿	日作 も	四冊	童學往來	童學 を	一冊
神明憑談	日作 和	二冊	立身始末鑑	立身 を	一冊
中臣後談解	神祕口傳 か	二冊	見外白うろり	見外 を	五冊
之才諸神存記	寺島良女著 外代の 乃	五冊	當世くろくろり	當世 を	五冊
和漢太平廣記	和漢の の	五冊	唐詩朗詠集	唐詩 を	二冊

天明七年丁未秋九月開彪

京師 二條通柳馬場東入町
 江戸 本石町十軒店
 大坂 山崎 金兵衛
 泉本 八兵衛

